明治学院大学キリスト教研究所
ニュースレター

あんげろす

2010.12.02

「献身」

佐藤　寧

私たちは、多かれ少なかれ挫折を経験し、そしてそんな時、将来に対してひどく不安を抱き、場合によっては希望すら持てなくなることがあります。しかし振り返ってみると、私たちは多くの人に支えられて今日の自分があることに気づきます。

1975 年12 月にアメリカの月刊誌『タイム』に「生きている聖人」特集で、マザー・テレサと並んで一人の日本人女性が紹介されました。「複生病院の天使」と紹介されたこの女性の名は井深八重です。実は、井深八重の伯父が明治学院の初代総理（今で言うと学長兼学院長）だった井深梶之助です。八重の父親、彦三郎は明治末に国会議員にまでなった人物ですが、家庭を顧みないことから家庭が崩壊し、八重は伯父の井深梶之助のもとで養育されました。

八重は、小学校を出ると京都の同志社女学校に入学し、やがて専門学部英文科を卒業して長崎高等女学校の英語教師になります。家庭崩壊という悲しい出来事はあったにせよ、彼女にとってここまでの人生はともかく順調に見えましたが、一年が過ぎた頃に体に赤い発疹ができました。病院で診察した直後に、伯父夫婦に治療のためということで東京に呼び戻されます。そして、治療のために到着した場所は富士山の裾野、御殿場でした。木立の中に灰色の建物が点在する一角で、「神山復生病院の院長」と名乗るレゼー神父が彼女を出迎えました。ところが、レゼー神父と伯父夫妻の会話から八重は、自分の病名がライ病と呼ばれるハンセン病であることを知りました。大正8 年の夏のことです。

（次頁に続く）

当時、ハンセン病は「遺伝病」「不治の難病」といわれ、社会の激しい偏見と差別にさらされていました。この病気になると抹消神経と皮膚が侵され、顔や手足の変形をまねくために、患者は社会から隔離されていたのです。神山復生病院はキリスト教の信仰に基づく患者救済の療養施設で、そこに取り残された八重は、自分の過去を消し、家族、親戚に迷惑が及ばないよう匿名を名乗る慣例に従って「堀清子」と名づけられました。その時の心境を彼女は後に、「一生分の涙を流しました」と記しています。

ところがそれから少し時が経って、八重はとても不思議な光景を目にします。神山復生病院は、寄付だけが頼りの病院なので、貧しく、自給自足で賄っていました。したがって、病院とはいっても毎日、耕作や、牧畜や、裁縫などの作業を患者たちは行っていたのです。しかし、その患者たちの間からは笑い声や楽しい歌声が絶えなかったのです。彼女は後にその光景を「絶望にあって、まるで楽園のよう」と言っています。

異郷の地にあって、病人を我が子と呼びながら、献身的に働く年老いたレゼー神父や、「大切なのは魂の尊さ」と信じてお互いに助け合っている患者と生活を共にして、彼女の心境が変わります。それから3年後、病状が進行しない八重に、神父は東京で診察を再度してもらうように促します。診断の結果、八重は「健康で異常なし」でした。つまり、最初の診察が「誤診」だったのです。それからの彼女こそが、後に、『タイム』誌で「天使」と称せられるような働きをするのです。

八重は、すぐに東京の看護学校促成科に半年間学び、御殿場に戻ります。彼女はそのときのことを次のように表現しています。「御老体の大恩人や、気の毒な病者たちに対して踵をかえすことが出来ましょうや」。彼女は神山復生病院初のしかも待望の看護婦になり、献身的な働きを始めます。当時のハンセン病の治療としては、化膿した患部を消毒し、治療用の油を刷り込み包帯を巻くことが唯一の手当てでした。

戦後、八重はアメリカとカナダで募金活動に奔走し、医療設備の充実に貢献します。昭和 20 年代末には特効薬ができて日本でも普及し始め、その後、ハンセン病は感染力が弱く、薬で完治することが国際的に認知されました。

井深八重の功績が認められ、度々表彰されます。特に、62 歳でローマ法王から聖十字勲章が、その 2 年後には看護活動に対する世界最高の栄誉であるフローレンス・ナイティンゲール記章が贈られたことは、八重が類まれな女性であったことの証です。しかし、どうして彼女の存在がわが国ではほとんど無名に近いのでしょうか？

彼女に関する本を読んでみると、彼女は人前で多くを語ることなく、寡黙に徹していたようです。また、彼女の口癖は「自分の力じゃないのだから」でした。弱者に寄り添い、一生を弱者とともに歩んだ彼女は、まさしく「天使」のようだったと思います。そんな井深八重の謙虚さに感銘した多くの人が、看護や奉仕活動の道へ進みました。最後まで社会の偏見がなくなることを願いながら昇天したのは、平成元年です。そして、ハンセン病患者への差別を社会に植えつけた悪しき法律である「ライ予防法」は平成 8 年にやっと廃止されました。

井深八重の生きた時代は女性の社会進出を歓迎しなかったようですが、彼女の生き方は、常に社会の弱者とともに歩んだイエス・キリストの姿を思い出させてくれます。

第 53 号
2010.11

「韓国強制併合条約」100年と日本キリスト教

徐正敏

2010年は、言わば「韓国強制併合条約」100年にあたる年である。日韓間において、この歴史的事件に対する学術的集会や検討の機会が何度かあった。筆者も日韓関係を専攻する研究者としてこのテーマに関する執筆の機会を数多く得、関連ある主題に関する講演の依頼を受けることもあった。ここでは終戦後間もなく韓国が解放された後に、日本キリスト教界が表明した「韓国問題」に関する見解を中心に考えてみたい。

今年の8月15日、韓国NCCと日本NCCは「日韓強制併合100周年」にあたり共同声明を発表した。その核心的内容は、日本が強要した100年前の「韓国併合条約」は、脅威と武力による不法な条約であり、それが源泉無効であったということを確認することだった。もう一歩すすんで、両国国会はその条約が無効であったことを共同で明らかにすることは勿論、その条約によって始まった日本の韓国植民統治は、35年間にわたって韓国人が展開した独立運動に対し弾圧と刑罰を加えた、人道主義に反する植民地犯罪であったことを確認し決議することを促す内容だった。このような内容は、戦後今に至る過程の中で、日本キリスト教界が公にした告白書、声明書、決議案などの内容と比較してみると、最も力強く、最高の水準であるに違いない。

戦後、日本キリスト教界で韓国問題と関連した意味ある初の声明は、1967年3月26日「日本基督教団」の議長の名義で発表された「第2次世界大戦下における日本基督教団の戦争責任に対する告白」であった。ここでは初として日本の韓国とアジア他国に対する侵略と支配に対する過ちを認め、これに「日本基督教団」が積極的に参加し協力した事実に対する懺悔の意を表した意味深い告白であった。その後、日本の各教派や各キリスト教機関が、歴史的問題に対する告白的な見解を発表してきた。1967年の声明後、しばらく沈黙のときがあったものの、1976年「日本改革教会」は30年周年宣言でもう一度この問題を論じ、1980年に入ると「日本バプテスト教会連盟」、「日本聖公会」、「日本キリスト教会」、「日本ナザレン教団」、「日本福音ルーテル教会」などが一斉にこの問題に対する懺悔の声明を発表した。その内容はやはり、日本の韓国支配と植民地統治の圧力そして、そのような過程で日本キリスト教界が犯した植民地支配への協力と、戦後それについて沈黙した罪を悔い改めることが主な内容であった。その他にも、天皇制イデオロギーを受け入れ、神社参拝強要を支持したことを、信仰的良心から悔い改める内容が含まれた。特に1995年には戦後50周年を記念し、日本キリスト教界諸々の教派と団体の九カ所から戦争責任告白の声明書が発表された。筆者が大まかに整理してみたところ、日本キリスト教界が戦後、韓国問題を主題に発表した声明書は37編に上り、どれもほぼ同様の内容となっているということができる。しかし、日本キリスト教界は、こうした戦責告白の段階に留まることなく、在日問題とその解決に前向きに取り組み、

韓国キリスト教界との実質的な姉妹関係を結ぶなど、実践的な活動に連結させた。特に一定の時期、進歩的な韓国キリスト教界が心血を注いだ民主化運動に、日本キリスト教界は友愛と協力の精神を発揮し、韓国教会と歩みを共にした。

これら一連の過程を見てみると、韓国問題に対する日本キリスト教の態度が実質的な変化を遂げていることは明らかであり、これから日韓国関係において両国のキリスト教が担って行かなくてはならない希望ある連帯の可能性を語る要素もなっている。100 年前、日本キリスト教界が「韓国強制併合条約」を支持しそれを積極的に宣伝して行ったのに比べれば、現在の日本キリスト教の韓国問題に対する言葉としても悔い改めはこれ以上必要ない段階まできている。やはりこのような歴史認識は行動と実践の領域で実を結ぶということを確信しているところだ。

(ソ・ジョンミン　協力研究員・韓国延世大学教授)

ナイジェリア女性作家アディーチェの長編
―ビアフラ戦争と恋物語(ラブストーリー)―

小林孝吉

ナイジェリア出身の女性作家チママンダ・ンゴズィ・アディーチェは、今年の一〇月、国際ペン東京大会の招待作家としてはじめて来日した。アディーチェは、数百万人の犠牲者をだしたといわれる、一九六七から七〇年までつづいたビアフラ戦争の起こった一〇年後に南部エヌグでイボ人として生まれ、大学町スッカで育ち、一九歳で渡米して政治学、アフリカ学などを学び、三三歳の現在アメリカとナイジェリアを行き来しながら、その内戦の記憶に目を向けた作品を発表している。

彼女は二〇〇三年に短編「アメリカ大使館」でO・ヘンリー賞、初の長編『パープル・ハイビスカス』でも複数の文学賞を受賞するなど若くして欧米で注目され、二〇〇七年には内戦をテーマにした長編『半分のぼった黄色い太陽』で、史上最年少でオレンジ賞を受賞し、その作品は河出書房新社から詩人のくぼたのぞみさんの翻訳で八月に出版された。なお、日本で最初に出版されたのは、短編集『アメリカにいる、きみ』(くぼたのぞみ訳、河出書房新社、二〇〇七年九月)である。

アディーチェの小説が日本ではじめて紹介されたのは、『アメリカにいる、きみ』に収められた、今回の長編と同一タイトルの短編「半分のぼった黄色い太陽」で、私が編集員を努める大学の評論誌上であった。五年ほど前であろうか、その雑誌でアフリカ特集を組んだとき、新しいアフリカの小説を掲載したいと、私が訳者のくぼたのぞみさんに依頼したことによる。私はまったく知らなかったアディーチェの短編を読んだとき、それまでの子どもの写真を通した飢餓のイメージが染みついたビアフラ戦争の記憶が、小説ではアフリカの未来へとつながる希望が表現されていることに心うたれた。

この短編は、雨季の真っ盛りに、ナイジェリアから分離・独立し、ビアフラ人の共和国をめざした学生たちが集会のあと寄宿舎まで歩いて帰る誇らしげな場面からはじまり、主人公の〈わたし〉と戦場で左腕を失った恋人ニャムディの小さな結婚式で終っている。作品中、ニャムディは〈わたし〉にいう。――この苦しみを大いなる国に、アフリカの誇りに変えるんだ、と。だが、彼らのたたかいは無数の

虐殺による死者を生み、ビアフラ共和国はついに見果てぬ夢に終わったのだ。

長編『半分のぼった黄色い太陽』も、短編同様にビアフラ戦争と幻の共和国をめぐる記憶の物語である。しかも、ここに描かれているのは、六〇年代のナイジェリアの権力と腐敗の政治、数百ある民族の対立、キリスト教とイスラム教など宗教問題、それらが激しく渦巻く坩堝としての時代であり、それを映しだしていくのがいくつかの悲しくも美しいラブストーリーなのだ。

この作品は、ビアフラ共和国を舞台に、ハウスボーイの少年ウグウ、その主人で大学で数学を教えるインテリのオデニボ、ラゴスの裕福な家庭で育ち彼の妻となる知的なオランナ、双子の姉カイネネ、恋人のリチャード……そんな人たちの激しいラブストーリーとともに、北部のクーデターからはじまった内戦が、彼らの生活も、希望も、愛も、すべてを破壊していく過程を、記憶(ナラ)の物語(ティブ)として描きだしていく。ここにはいわゆる内戦による虐殺や飢餓などの悲惨な姿よりも、人を愛すること、愛する人を失うこと、恋愛の裏切りと和解、人として生きることの尊厳……などが、時代の闇と政治の悪のなかに、不思議な光の片鱗を放っているように見える。作品のタイトルとなった〈半分のぼって黄色い太陽〉とは、ビアフラ共和国の国旗のことである。だが、文字通りビアフラの太陽は半分のぼったままで地に墜ちることになる。

小説のなかには、「私たちが死んだとき世界は沈黙していた」という一行が強調して繰り返し記されている。六〇年代後半のビアフラ戦争と死者たち——その世界の沈黙は、アフリカの苦悩を前に、いまでもつづいていないだろうか。

(こばやし・たかよし　協力研究員・文芸評論家)

聖地巡礼

田中浩司

今年5月にイスラエルとエジプトのツアーに参加する機会が与えられた。限られた字数の中で簡単に報告したい。

午後8時20分、成田よりウズベキスタン航空に乗り、関空に立ち寄る。関空よりタシケントへ。タシケントで違う便に乗り換えて一路テルアビブのベン・グリオン空港へ。成田からの合計飛行時間は約13時間。到着したのは翌朝10時30分。

初日、空港よりバスに乗り、エルサレム入城。高い壁に囲まれたパレスチナ自治区へ直行。ベツレヘムにて聖誕教会・聖カトリーナ教会・よき羊飼いの野の教会を訪問。自治区を出て後、エン・カレムの洗礼者ヨハネ誕生の教会を訪れた。

2日目、オリーブ山周辺へ行き、ゲッセマネの園、および園に隣接する万国民の教会(苦悩の教会)を訪問。次にエルサレム旧市街に向かい、まずはユダヤ教徒地区の西壁(嘆きの壁)とダビデの町を訪れ、ギホンの泉、シロアムの泉を見学した後、シオンの丘に上り、聖ペトロ鶏鳴教会を見学。キリスト教徒地区に入り、今や旅行客相手の商売の道と堕したヴィア・ドロローサ(悲しみの道)を経て聖墳墓教会に至る。後、イエスが葬られたとされる園の墓を訪れ、墓穴へ入った。園からは、ゴルゴダの丘と称される丘が見える。その丘を園から展望すると髑髏に似ているが故にそう称されているらしいが、真偽のほどは定かでない。真のゴルゴダの丘は聖墳墓教会の中にあるというのが従来の説。

3日目、緑豊かなエルサレムを出て、東に行くことわずか30km にして、風景は一転、赤茶けた岩石ばかりの荒涼たる砂漠地帯である死海地方に。海抜0m地点を経てバスは海抜マイナス地帯へ

下る。クムランにて洞窟と死海写本を、エン・ゲディ国立公園にてダビデの滝を見学した後、ソドム山の麓にてロトの妻の塩柱を見上げつつ岩塩を拾う。イスラエル最南端のエイラットで紅海を南に望みながら昼食。タバの国境にてエジプト入国手続きをする。バスを乗り換えて一路シナイ山麓へ。カトリーナ修道院近くのヴィラ・ロッジに宿泊。

4日目、午前1時に起床し、1時半、真っ暗な中、片手に登山用ステッキ、頭にライトをつけてシナイ山登山開始。麓には真夜中にもかかわらずベドウィンがたくさんいて、我々を日本人であることを認識して「ラクダ、ラクダ」と言って、しきりにラクダの利用を促してくる。体験者によるとラクダによる登山は振り落とされないようにしっかりつかまっているのが結構大変で意外に疲れるとのこと。私はベドウィンのガイドに誘導されながら(初めての山の夜道の登山なのでガイドなしで登ることはできない)、自力で山頂まで登るグループの方に加わった。休み休み歩いて、約3時間で山頂に到着。モーセの時代を回想しながら日の出を待つ。夜が明けて、360 度周りを見回し、思いのほか険しい山を登ってきたのだと気付いた(標高 2285m)。

5日目、死海(海抜－420m)にて浮遊体験。目に海水が入ると目がつぶれる、長めに入りたい人は5分ごとにシャワーを浴びないとナメクジみたいに体が溶けてくると注意される。マサダ国立公園にてユダヤ人最後の砦を見学。ビジターセンター内の店で死海化粧品を土産に買う。タバに戻り、「出エジプト」の税関手続き。係官の点検作業が遅く、流れが止まって、長時間待たされる。イスラエルに戻り、ナザレに向かう。受胎告知教会・聖ヨセフ教会・シナゴーグ教会を訪問した後、突き落としの崖よりナザレの町を一望。北にヘルモン山、東にタボール山を望む。

6日目、ガリラヤ湖にて遊覧船に乗る。湖は豊かな緑に囲まれていて、ハチドリやサギなども飛来。湖畔の建物には 1986 年の未曾有の渇水で湖底より上がったと言われるイエス時代のものと同定される船が展示されていた。カペナウムにてユダヤ教のシナゴーグ跡を、タブハにてパンと魚の奇跡教会・山上の垂訓教会・聖ペテロ召命教会を見学。最後にカイザリアに向かい、ローマ時代の円形劇場と導水橋を見学して、この旅を締めくくる。

厳しい通関手続きを無事経てテルアビブを出発(イスラエルは入国より出国手続きの方が厳しい)。翌朝、タシケント空港で飛行機を乗り換え、東京に戻ったのは午後7時 30 分だった。

内村鑑三・植村正久など、かつての偉大な日本のキリスト者さえ一度も訪れたことのないイスラエルにてイエスの足跡を辿り、エジプトにてモーセの如くにシナイ山に登って聖書の世界が体感できたことは、現代に生きる我々の恵みである。

聖書の世界の史跡めぐり、名所見物は、費用と時間と体力さえ許すならば、現代に生きる日本人ならば誰にとっても可能なことだ。しかして、真に大切であり、困難なのは、いついかなる場所においてもイエスの御跡をたどり、イエスと共に生きるということである。

ツアーに同行した方の中に、身体が不自由であるにもかかわらず見事にシナイ登山を果たした女性の方がいらしたが、その方は、シナイ山を登っていた時よりも、帰国して職場に戻って以降の方が足の調子が悪く、歩くのに難儀していると後日語っていた。彼女は勿論自身の肉体のことを述べていたのであるが、このことに関しては、我々の一般的・霊的な側面においても同じことが言える。聖地を訪れ、イエスの足跡を辿ったり、敬虔な気持ちを抱いたりすることはたやすいが、日本に戻り、職場や家庭に戻って、イエスの御跡に従い、

敬虔であり続けることは難しいからである。

実に聖地を敬虔に歩くは易く、世俗を敬虔に歩くは難くある。聖地旅行から戻って早6ヶ月、聖地で落としたはずの世俗の埃と垢は再びわが身に舞い戻り、日々主に赦しを乞い、死海のほとりで買った石鹸でわが身を洗い続けるより他、詮方なき毎日である。

（たなか・こうじ　協力研究員）

研究所雑録

渡辺祐子

酷暑の夏が終わったのがつい昨日だというのに、秋らしい秋を感じることのないまま冬を迎えようとしています。

井深八重が働いていた御殿場の神山復生病院には、大学生のころ教会の青年会で訪問したことがあります。もと患者の方々と親しく交わっただけでなく、握手を通してその障害を自分の身体で感じることができた貴重な体験でした。もちろんそのころ井深八重はすでに引退しており、恥ずかしいことに不勉強の私は彼女の名前すら知りませんでした。八重を紹介するのに、遠藤周作の小説やそれをもとにした映画「愛する」（熊井啓監督）の主人公のモデルであるといっても、今の学生たちにはまずピンと来ないでしょう。けれども、静かにしかし強固な意志を持って日本社会から排除された人々に仕えた八重の生涯を、私たちは記憶にとどめる責任があるように思います。実は執筆者の寧先生は、昨夏大病を経験されました。このエッセイには、大病を得ていっそう人間への洞察を深められた先生の思いがこめられているような気がしてなりません。

新聞や雑誌、あるいは口コミで紹介された本にその場で興味を持ち、ぜひ読もうと思っても、いつの間にか作者の名前もタイトルも忘れてしまう、こんなことが最近ますます増えてきました。小林先生が紹介してくださっているアディーチェもそのひとり。先日朝日新聞が月に 2 回発行しているGLOBE という別刷りで彼女のインタビューを読み、とても心打たれたのですが、名前すら忘れてしまっていたのです。はからずも小林先生のエッセイでもう一度思い起こすことができました。感謝です！

徐先生の日本のキリスト教界への高い評価にも素直に感謝を覚えたいと思います。しかしそれはひとつの到達点すぎず、同時に出発点であることを肝に銘じたいものです。キリスト教大学である本学でも、徐先生の期待にこたえ得るような教育をしていく必要を痛感しています。

行ったことのない聖地の風景が文章から浮かび上がってくるような田中先生の素敵なエッセイは、しかし最後に鋭い指摘で締めくくられています。「世俗を敬虔に歩くは難くある。」これもまた肝に銘じたいことばです。

当研究所では秋学期も皆さまのお支えの下、大小の研究会、シンポジウムを開催することができました。また昨年から始まったヘボン塾校友講座も多くの受講生に恵まれ、間もなく最終回を迎えようとしています。来年に向けて新しい試みも着々と計画されております。研究所が大学の内外に果たすべき使命とは何かを、常に祈りつつ考えてゆきたいと思います。

（わたなべ・ゆうこ　主任・本学教養教育センター准教授）

2010年度8月-12月の研究所活動
(詳細は各チラシをご覧ください。)
所員会議
第5回
日時:2010年10月27日(水)14:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所
第6回
日時:2010年11月24日(水)14:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所

査読委員会
日時:2010年9月29日(水)14:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所

明治学院研究1集まり
日時:2010年11月24日(水)16:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所

公開研究会
白金文学研究PJ
「—明治・大正の作家について—
岩野泡鳴 雑感」
講師:野口存彌(作家・評論家)
日時:2010年10月9日(土)13:30-
場所:白金校舎キリスト教研究所

キリスト教主義教育研究PJ
「祈り、歌、黙想 キリスト教主義教育から見たテゼの意義」
講師:植木 献(当研究所所員、本学教養教育センター准教授)
日時:2010年10月27日(水)16:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所

キリスト教文化研究PJ
総合テーマ:「椎名麟三の文学研究」
第3回
「椎名麟三未発表創作ノート(1943(昭和18)年」
(1)『男の悲劇ノート』挿話—(少年時代)
(2)『光静かなるところ』
講師:丸山義王(当研究所協力研究員)
日時:2010年12月11日(土)13:30-14:40
場所:白金校舎キリスト教研究所
第4回
「埴谷雄高『死霊』と椎名麟三の文学」
講師:小林孝吉(当研究所協力研究員、文芸評論家)
日時:2010年12月11日(土)14:50-16:00
場所:白金校舎キリスト教研究所

SCA研究会
第3回
日時:2010年8月20日(金)13:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所
第4回
日時:2010年9月24日(金)13:00-
場所白金校舎キリスト教研究所
第5回
日時:2010年10月22日(金)13:00-
場所白金校舎キリスト教研究所

公開研究会・シンポジウム
賀川豊彦講座委員会講演会
「仁と愛の資本主義～渋沢栄一の教え～」
講師:渋澤 健(シブサワ・アンド・カンパニー株式会社代表取締役)
日時:2010年10月16日(土)14:00-
場所:白金校舎3203教室

戦後65周年シンポジウム

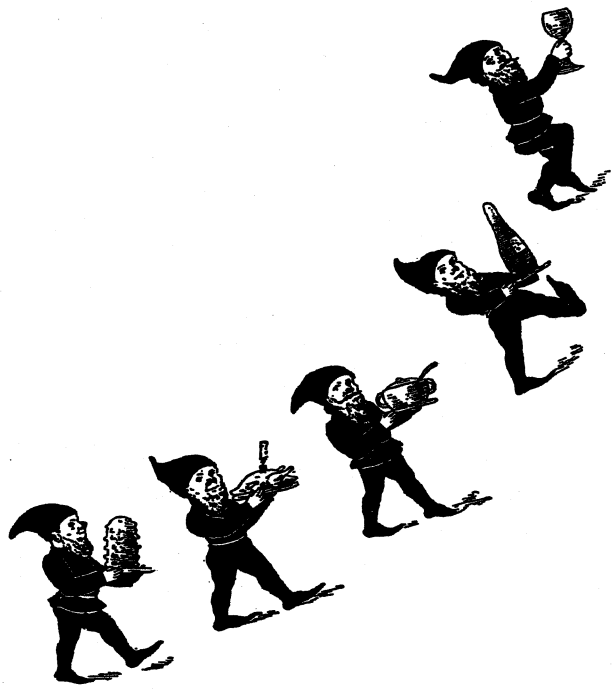
「東アジアの戦後「和解」のために
~いま何が求められているのか？~」
日時:2010 年 11 月 14 日(日)13:00-18:00
場所:白金校舎 2 号館 2102 教室
共催:キリスト教研究所、国際平和研究所

2010 年度ヘボン塾校友講座
時間:土曜日 3 限
場所:白金校舎本館 1252 教室、2 号館 2101 教室
第 1 回～第 3 回:ヘボン
講師:中島耕二(当研究所協力研究員、本学非常勤講師)
第 4 回～第 6 回:島崎藤村
講師:村上文昭(当研究所協力研究員)
第 7 回～第 9 回:賀川豊彦
講師:米沢和一郎(当研究所協力研究員、本学非常勤講師)
閉会式
日時:2010 年 12 月 11 日(土)13:05-
場所:白金校舎 10 階大会議場

新着図書(8 月-11 月)
雑誌
・『説教黙想』No.69、日本キリスト教団出版局、2010。
・『説教黙想』No70、日本キリスト教団出版局、2010。
・『福音と世界』No.8、新教出版社、2010。
・『福音と世界』No.9、新教出版社、2010。
・『福音と世界』No.10、新教出版社、2010。
・『福音と世界』No.11、新教出版社、2010。
・『福音と世界』No.12、新教出版社、2010。

和書
・『植民及植民政策』(矢内原忠雄著)、有斐閣 1926。(遠藤所員寄贈)
・『清末・幕末に於けるS・ウェルズ・ウィリアムズ生涯と書簡』(宮澤眞一訳)、高城書房、2008。
・『波うちぎわの Satsuma 奇譚』(宮澤眞一著)、高城書房、2009。
・『国際理解の四重奏』宮澤眞一著)、高城書房、2010。
・『公共福祉という試み―福祉国家から福祉社会へ―』(稲垣久和著)、中央法規出版、2010。(著者寄贈)
・『S.E.バレンタイン　現代聖書註解　レビ記』(山森みか訳)、日本キリスト教団出版局、2010。

DVD
・『森井眞　自由と尊厳を語り続ける歴史学者』(豊雅俊監督)、NPO法人東京シューレ　シューレ大学映像プロジェクト、2010。
・『永遠のふるさと～唱歌・童謡から讃美歌へ～』(手代木俊一監修)、2010。(手代木協力研究員寄贈)



あんげろす　ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす　第53号

2010年11月30日　発行
明治学院大学キリスト教研究所
〒108-8636　東京都港区白金台1-2-37
TEL:03-5421-5210／FAX:03-5421-5214
Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷　浩